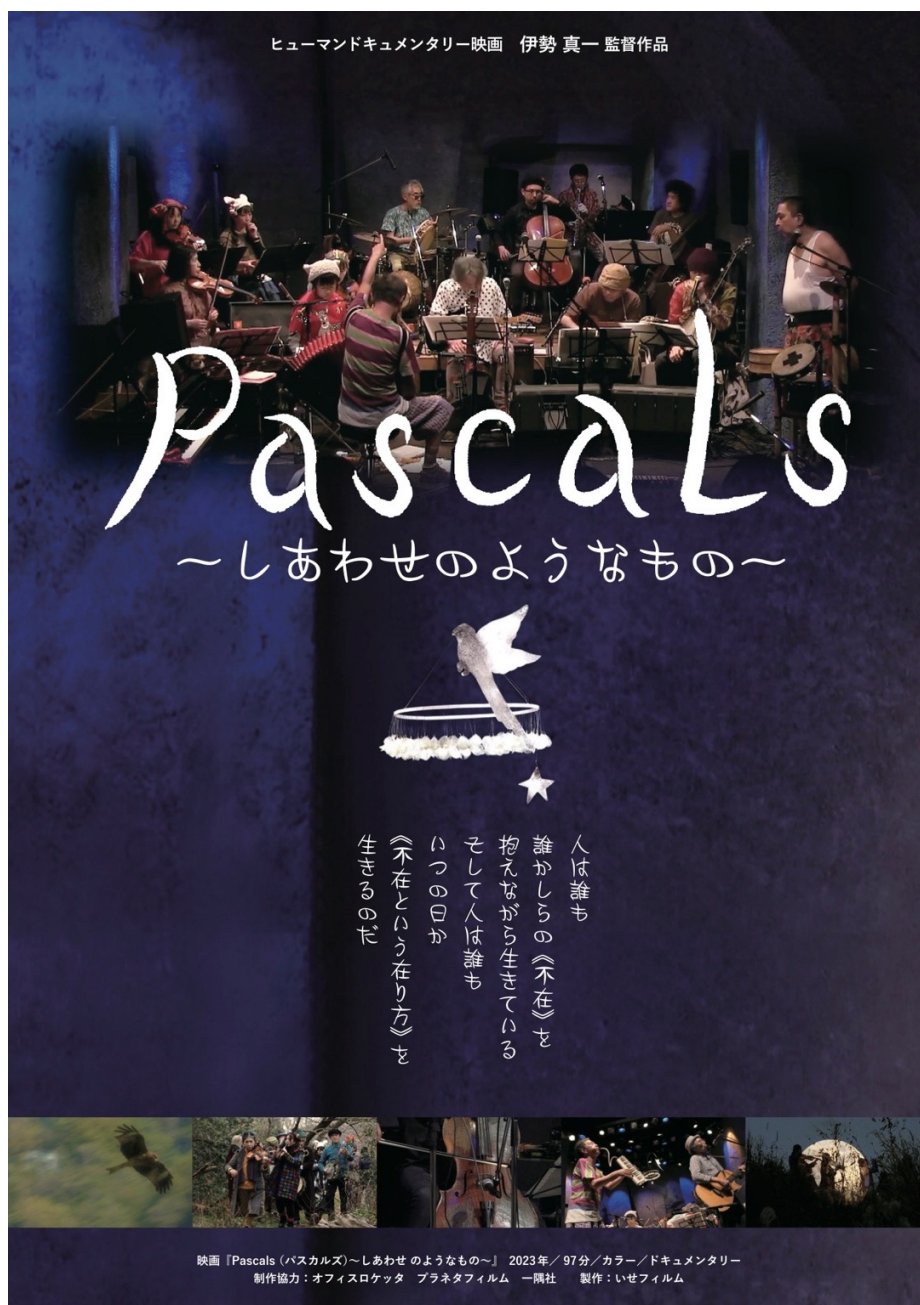


ドキュメンタリー映画

# 『Pascals ~しあわせのようなもの~』 プレスリリース



予告編

いせフィルム

TEL. 03-3406-9455 FAX. 03-3406-9460

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-9-4 トーカン渋谷キャステール406

E-MAIL. [ise-film@rio.odn.ne.jp](mailto:ise-film@rio.odn.ne.jp) HP. <http://www.isefilm.com/>

## 《不在》の音

2021年の正月、ひょんなことからパスカルズの「さるハゲロックフェスティバル」用のショートムービーを頼まれて、ほとんど初めてのようにパスカルズのみんなと出逢った。でも、ずいぶん昔からの友達のような気がしたし、音楽も、なんだかとても懐かしかった。

リーダーのマツさんは、前の春に突然旅立ったメンバーのチェリスト 三木黄太さんのことをとても気にされて、そのショートムービーを三木さんに捧ぐような気持ちのものにしたいと言っていた…。マツさんはその気持ちのままに、2021年の春と2022年の春、コロナ禍の中で、三木さんの追悼ライブを企画した。メンバーのみんなの気持ちも同じだったに違いない…。私も撮らないわけにはいかない気持ちになっていた。

「25年来一緒にバンドをやってきたから、もう三木さんのチェロの音がパスカルズみんなのカラダの中に入りこんじゃっているんだ…」と語ったまま、マツさんは黙った…。

2022年の秋、三木さんが最期の時を過ごした長野・伊那谷の工房を訪れ、付近の森を歩きながら、きっと三木さんのカラダの中にもメンバー13人のパスカルズの音が入りこんでいたに違いない…。その三木さんのカラダがこの森の空気に触れていたんだ、と感じたとき、パスカルズの音楽が聴こえてきた。

ふと《しあわせのようなもの》というサブタイトルが浮かんだ。

「《不在》という在り方もある…」と  
パスカルズのもう一人のチェリスト坂本弘道さんは、三木さんの《不在》を語ってくれた。  
《不在という在り方》を抱えながらのパスカルズの音楽が、映画に写ったような気がする。

人は誰も、誰かしらの《不在》を抱えながら生きている。

そして、人は誰も、いつの日か

《不在》という在り方を生きるのだ。

耳を澄ませると確かに聴こえてくる。

《不在》の音、が聴こえてくる。

音楽は いいなあ…

映画も いいけど…

(かんとく・伊勢真一)





# Pascals

## パスカルズとは

1995年に結成されたアコースティックオーケストラ的なバンド。パスカルズのメンバーが奏でる楽器は、鍵盤ハーモニカやギター、ウクレレ、バイオリン、チェロ、トランペットやバンジョーの他に、オモチャや笛、片手鍋やお風呂の桶などの日用品まで、多種多様だ。テクニックやジャンルにとらわれない自由なスタイルから生まれるパスカルズの音楽は、異国の景色や日本の原風景が織りなすノスタルジーを醸し出して、世代を問わず、聴く人に自由と解放感を与える。そして、星の集まりが銀河になってゆくようなパスカルズのライブは、さらに一体感と高揚感を与える。

2001年、フランスの音楽家、パスカル・コムラード (\*1) プレゼンツによるCD『Pascals ふらんす de でお〜る』が、ヨーロッパ、アメリカ、アジア各地で発売される。

CD『Pascals ふらんす de でお〜る』は、「ル・モンド紙の“CHOC of The Month”、テレマ誌の“ffff”、レス・インロックプティブル誌の推薦シール (\*2)」を獲得、フランスでも稀なトリプル受賞となった。「東洋独特のデリケートなメロディ。冒険心、遊び心」などと絶賛され、以降、ヨーロッパツアーに招聘されている。

パスカルズのライブは、隣にいる人を撫でたり、  
警備員と「君のあごヒゲひっぱるぞ」(フランスの童謡)を歌いたい気分させたり、  
ドラッグなしで人々の目を光り輝かせてしまう。  
くだらなさや中途半端な妥協のいっさいないパフォーマンス。  
(ル・モンド紙ライブ評)

現在は、ライブ活動のほか、テレビドラマ、映画、演劇などの音楽も多く手がけている。

\*1 パスカルズの名前の由来の人物。

現代のサティと呼ばれ、フランスの若者たちにカリスマ的人気を誇るアーティスト。

\*2 いずれも各紙の推薦盤に与えられるシール。

# パスカルズの音楽は僕には、 生きることへの賛歌に聴こえる。

ほんとに時々だけど、朝、目が覚めてカーテンを開けて、  
窓の外の草や木に光が差しているのを見たときとか、僕はここに生かされていると思うことがある。

その気持ちは、猫に御飯をやらなくちゃとか、  
コーヒーを飲もうとかいう気持ちにすぐに紛れていってしまうのだけど。

今、パスカルズのCDを聴きながら、その瞬間の気持ちをふと思い出してしまった。

ここに生かされていることを喜びと感ぜられるように、僕はふだんの日常を生きていない。  
まして、今日一日を生きたことへ感謝したりしない。

たぶん、病気で入院している人や、戦渦の中にいる人や、  
いつも外敵の攻撃に身をさらされている弱い生き物などには、一日は大きく特別なものなのだろう。

パスカルズの音楽は僕には、生きることへの賛歌に聴こえる。  
この世界に生まれ生きる誰もが、喜びとともに生きる権利をもっているし、  
いいところも、悪いところも、欠点もクセも、うぬぼれも自信のなさも含めて、ひとつの命はたったひとつだ。

たったひとつの命だから、たったひとつの命である他人の一生を尊重できる。  
人間が長い時間をかけて作ってきた規則とか基準とか慣習とか世間体とか、  
まるで、おまえは僕と同じだというように振る舞うから、比較が生まれ、差別が生まれ、  
僕らは僕は僕で、他の誰ともちがうということを、つい忘れてしまいがちなだけだ。

パスカルズは14人の個人がひとりひとり他の13人の生を尊重することで成り立っているバンドだ。  
たぶんそれは、僕の知るロケット・マツにとっての理想の国だ。

2002年 秋

詩人、音楽ユニット"ボーイ・ミーツ・ガール" 尾上 文







# Pascals

## メンバー

(写真: サカイユウゴ)



ロケット・マツ

Rocket Matsu BAND MASTER

鍵盤ハーモニカ、アコーディオン、ピアノほか

1956年12月東京生まれ。作曲、編曲も数多く手がけ、劇中では『走れ廻れ』『326』『リボン4拍子』『Taking Dog Fields』『のはら』がある。1980年、ロックバンド「THE CONX」に参加。並行して様々な歌手のレコーディングやライブのサポートを続けている。高田渡、友部正人、尾上文、福島泰樹、友川カズキ、大工哲弘、松永希など。近年、重い腰を上げ、ピアノソロ・ライブを始めた。2020年、ピアノ・ソロアルバム『こりす alone』をリリース。演劇やTV番組の音楽制作も担う。

あかね Akane

トイピアノ、鍵盤ハーモニカ、ボーカルほか

猫耳がついたニット帽がトレードマーク。コーラスや作詞作曲も行う（劇中では『思い出』）。「うつお」（パスカルズメンバーうつおのソロ）や「兄弟」（青木タカオとのユニット）、ソロの「あかね」などでも活動。CDや詩集、movie musicなど自主製作の作品も多数発表している。



## 金井太郎 KANAI Taro

ギター、コーラス

アコースティックギターやエレキギターを演奏し、作曲も行う（劇中では『ガタタンロード』『希求』）。80年代ロックバンド「THE CONX」「後退青年」で活動後、CMなどのスタジオワークを開始。その後パスカルズ結成に加わる。絵画のイメージアルバム、『イバラード』『ダンテ神曲』に作曲、演奏で参加。その他、石橋幸、友川カズキ、PANTA、松尾清憲などのレコーディングに参加。近年は大竹サラ主宰「シルバノク」に作曲、演奏で参加。息子sou kanaiと「kanaibiza」をリリースしている。



(写真左)



## 知久寿焼 CHIKU Toshiaki

ウクレレ、カズー、ボーカル、オモチャほか

ギターとウクレレを連れてあちこち歌い歩いて暮らしている。1965年2月10日、埼玉県川口市生まれ。2003年バンド「たま」解散。2019年自身のバンド「ちくちんどん楽団」結成、2023年同名のアルバムを発表。2020年エレクトロユニット macaroomとのアルバム「kodomonon odoriko/macaroomと知久寿焼」発表。CM、Eテレ等での歌唱多数。ツノゼミ愛好家でもあり、2019年2人の昆虫学者との共著「不思議ないきものツノゼミ」をあかね書房から刊行、2022年「学研の図鑑LIVE昆虫新版」に撮影班として参加している。劇中で演奏される『326』では作詞を担当（作曲はロケット・マツ）。チェロの三木黄太が逝去して1ヶ月半の頃、散歩で出会った切り株から新芽が伸びているのを見て生まれた、三木黄太との思い出をうたった歌がある（『わかばのかんむり』）。

## 原さとし HARA Satoshi

バンジョー、コーラス

5弦バンジョー奏者。1963年富山生まれ・横浜在住。地元の曳山祭の囃子を聴いて育ち、17歳でバンジョーと出会い、現在もバンジョーの歴史の探究をライフワークとしている。

「パスカルズ」「Lonesom Strings」「トイメンシャオ」など様々なバンド活動を経る中の2004年、1854年に黒船の中でバンジョーが演奏された史実を知り、その日本初演のポピュラー音楽の再現を行う。祭囃子、ブルーグラス、オリジナルetc…様々なスタイルでバンジョーの可能性を広くとらえ演奏をしている。Eテレ『ムジカピッコリーノ』、映画『We are little zombies』ほかに出演。三木黄太といえば、フランスツアーで誰よりも早く起きて近所を散策し、旅と音楽を満喫していたことを思い出す。



## 松井亜由美 MATSUI Ayumi

バイオリン、木琴

学生時代にバンド活動を始め、1981年に「カトラ・トゥラーナ」に加入。三木黄太も参加した1stアルバムは欧州でも高い評価を得る。1982～2012年は新聞社やCS放送局で働きながら音楽活動続ける。1995年～「パスカルズ」、1997年～梅津和時率いる「こまっちゃクレズマ」に参加。現在は「パンチの効いたオウケストラ」「シルバノク」「ふくしまボトムズ」などでも演奏している。



## 堀口奈音 HORIGUCHI Naon

バイオリン

9歳よりバイオリンを弾き始める。学生オーケストラ、市民室内楽等を経て、1991年 音楽家のバックサポートとしてライブや録音に参加。2005年より無国籍インスト魂「ママクリオ(\*)」主宰。癒やし系、哀愁を帯びた音色、泥臭いバイオリンともいわれ、時代や地域、ジャンルにとらわれずに表現。

(\*)クリスティヌ(堀口奈音)、うえむらまさゆき、オオノミチル、ロケット・マツによる「ママクリオ」は、2015年に公開された伊勢真一監督の映画『ゆめのほitori 認知症グループホーム福寿荘』で音楽を担当した。



## うつお Utsuo

バイオリン、リコーダー、コーラス

どうぶつ(リス)の耳がついた帽子がトレードマーク。保育園で木琴、小学生時代にピアノを習う。合唱部(ソプラノ)、器楽合奏部(マリンバ、リコーダー、ハーモニカ、ハンドベル)に所属した後、ギター、作曲経験を経て17才よりライブ活動始める(「うつお」)。「ふたご」ユニットやバイオリン四重奏団「テトラ」などの活動も行う。



(写真右)



## 大竹サヲ OHTAKE Sara

バイオリン、リコーダー、コーラス

バイオリンのみのカルテット「テトラ」を経て、1995年にバスカルズに参加。2016年、自身のバンド「Sylvanok（シルバノク）」を結成。バンド活動以外に漫画家として、小学館刊行の少女漫画誌「月刊flowers」や「凜花」を始め、講談社刊行「モーニングオープン増刊」、集英社刊行「別冊YOU」等で執筆。2001年からバスカルズの欧州でのコンサートツアーについて描いたエッセイ漫画を「月刊flowers」に6年にわたり連載、2004年に単行本「地球道草アンダンテ」として小学館より出版された。



(写真左)



## 三木黄太 MIKI Kota

チェロ

1982年、伝説のバンド「カトラ・トゥラーナ」にチェリストとして参加。以来バックサポート、セッション等で、原マスミ、ばちかぶり、キリングタイム、レッド・ウォーリアーズ、谷川賢作など多数のミュージシャンと共演。1995年には坂本弘道、佐藤研二と共にチェロ三重奏団「CotuCotu（コツコツ）」を結成。音楽活動の傍ら、長野の工房でアートファニチャーギャラリーを主宰し、独創的な家具の制作を続けた。2020年4月27日逝去。ステージではチェロの坂本弘道とドラムの横澤龍太郎の間の席で演奏していた。

## 坂本弘道 SAKAMOTO Hiromichi

チェロ、エレクトロニクス、のこぎり、ボーカル

鉛筆が舞い、電動工具がうなる…世界にも類を見ないオリジナル奏法を駆使し、唯一無二の音絵巻を構築するパフォーマー。1999年リリースのソロアルバム『零式』は記念碑的作品。ソロ公演、多種多彩なセッションを国内外で展開する一方、作曲家として多くの舞台や映像などへの音楽制作を行っている。シスカンパニー『風博士』『奇蹟』、KERA MAP『修道女たち』、パルコプロデュース『桜文』、アニメーション『緑子/MIDORI-KO』等々。音楽フェス「JAZZ ART せんがわ」プロデューサー。





## 永畑風人 NAGAHATA Kazato

トランペット、サクソ、ガスホース

東京生まれ。パスカルズ創設以来のメンバー。本業は版画家で、パスカルズのCDジャケットのイラストなども手がけている（『17才』『Pascals ふらんす de でお〜る』等）。ガスホースのラッパは、ホースの両端にそれぞれトランペットのマウスピースとラッパのベルの代わりに漏斗がついたユニークな形状。劇中冒頭の実演シーンではハットを被った頭にガスホースのラッパを巻き付けて歩いている。三木黄太の妻のアニメーション作家である浅野優子とは、美術大学時代の同級生である。



## 石川浩司 ISHIKAWA Koji

パーカッション、オモチャ、ボーカルほか

1961年7月3日、東京にて逆子生まれ。白いランニングシャツに半ズボン姿がトレードマーク。手鍋や櫓の桶など日用品を使った組み立て式のパーカッションは自作の楽器。2003年にバンド「たま」解散。現在はソロで「出前ライブ」などの弾き語りおよびバンド「ホルモン鉄道」などでも活動。エッセイやなどなぞの本等の著作も多数。映画・テレビ・舞台等にも時折出演。西荻窪のアートギャラリー「ニヒル牛」のプロデュースや、自分の飲んだ缶ドリンクコレクションはおそらく世界一の約3万種類におよぶなどの顔も持つ。



## 横澤龍太郎 YOKOSAWA Ryutaro

ドラムス

1954年東京生まれ。5歳の時10歳年上の姉に子供ドラムセットをプレゼントされる。10代よりピアノ、ギター等の演奏を始める。数々のバンドを経て、20代からプロドラム演奏家として活動を始める。20代半ばよりレコーディング、ライブ活動を始める。主な参加セッションは、チャクラ、ネーネーズ、はにわオールスターズ、友部正人、原マスミ等々。1997年より「Ring Links (リングリンクス)」を主謀（～2000年）。3枚のアルバムと2枚のシングルを残した。植木職人の顔も持ち、タバコを燻らせながら植木の剪定も行う。





## 劇中の楽曲

### 走れ廻れ

作曲 ロケット・マツ

### 田舎の騎士道

作曲 三木黄太 (ドラマ『風のお暇』劇中曲)

### ガタタンロード

作曲 金井太郎 (映画『野のなななのか』挿入曲)

### 326

作詞 知久寿焼 作曲 ロケット・マツ

### 希求

作曲 金井太郎 (ドラマ『となりのマサラ』劇中曲)

### リボン4枚子

作曲 ロケット・マツ

### 思い出

作曲 あかね (ドラマ『となりのマサラ』劇中曲)

### 薄

作曲 三木黄太 (ドラマ『となりのマサラ』劇中曲)

### 鳥のうた

原曲 El Cant dels Ocells (カタルーニャ民謡)

編曲 坂本弘道

### 流山児★事務所「マクベス」劇中歌S11

原詩 金芝河 作曲 坂本弘道

### Taking Dog Fields

作曲 ロケット・マツ

### 夕暮れ

作詞・作曲 友部正人

### LA LLUNA ETC.

Traditional

### のはら

作曲 ロケット・マツ

### ハートランド

作詞・作曲 オクノ修



ヒューマンドキュメンタリー映画 伊勢真一 監督作品

## 『Pascals (パスカルズ) ～しあわせのようなもの～』

(2023年/97分/カラー)

20年来、変わることのないメンバーで活動してきた「パスカルズ」。しかし、2020年春、メンバーのチェリスト三木黄太さんが急逝してしまった…。2021年、2022年春、コロナ禍の下、三木さんを偲ぶライブを企画。その記録を中心にまとめられた、追悼のライブドキュメント。

### 伊勢真一 (いせ・しんいち)

ドキュメンタリー映像作家。

1949年東京生まれ。日常をふんわりと映し出す映像の中に、生きることの素晴らしさが込められた独特の作風で知られる。『奈緒ちゃん』(1995年/毎日映画コンクール記録映画賞ほか受賞)をはじめ、数々のヒューマンドキュメンタリーを自主製作し、自主上映を中心に作品を発表し続けている。

出演 Pascals ロケット・マツ (鍵盤ハーモニカ・アコーディオン・ピアノほか) あかね (トイピアノ・鍵盤ハーモニカ・ボーカルほか) 金井太郎 (ギター・コーラス) 知久寿焼 (ウクレレ・口琴・ハーモニカ・カズー・おもちゃ・ボーカル) 原さとし (バンジョー、コーラス) 松井亜由美 (バイオリン・木琴) 堀口奈音 (バイオリン) うつお (バイオリン・リコーダー・コーラス) 大竹サラ (バイオリン・リコーダー・コーラス) 坂本弘道 (チェロ・エレクトロニクス・のこぎり・ボーカル) 永畑風人 (トランペット・サクソフーン・ガスホース) 石川浩司 (パーカッション・おもちゃ・ボーカルほか) 横澤龍太郎 (ドラムス) 三木黄太 (チェロ) / ゲスト 菅原雄大 (チェロ) 四家卯大 (チェロ) うえむらまさゆき (ギター) 友部正人 (歌・ギター) / 音響 小俣佳久 / 舞台オブジェ BeBe / 撮影 世良隆浩 田辺司 金聖雄 宮田八郎 / 編集 尾尻弘一 / 整音・効果 永峯康弘 / 映像提供 吉祥寺スターバインズカフェ 浅野優子 / 映像・写真提供 サカイユウゴ / デザイン・ディレクター 遠藤郁美 / 製作・上映デスク 増馬則子 / 協力 ラ・カーニャ 新春! (有)さるハゲロックフェスティバル Run Productions / 制作協力 オフィスロケット プラネタフィルム 一隅社 / 製作 いせフィルム / 演出 伊勢真一

